

『緑のテーブル』作品分析(Ⅱ)

高野 牧子

1. 研究目的及び方法

本研究は『緑のテーブル』作品分析の継続研究である。クルト・ヨースの代表作である本作品は、1932年7月3日パリの国際振付コンクールで初演、1位を授賞して以来殆ど改変せず作品を保存し、世界各地で延べ上演回数が5,000回を超える近代が生んだ古典作品であるといえよう。

前回、作品構造をVTR分析し、時・空間構成の特徴を明らかにし、主要な役柄である死神の動きを分析した。そこで今回は批評文において死神がどのように解釈されているか検証し、併せてキリスト教文化圏における死のイメージの変遷をもとに考察する。またどの様な作品評価を得ているのか検証し、作品の同一性の観点より考察を加え、『緑のテーブル』の特性を結論づけていくことを目的とする。

研究方法は『緑のテーブル』に関する書籍、雑誌、新聞記事、111件を主にし、文献研究を行う。

2. 結果及び考察

(1) 『緑のテーブル』概要 省略

(2) 死のイメージ

①批評文における死神の解釈

批評文の解釈において、黒服の紳士たちの場面は愚かな外交会議として一義的解釈が成立しているのに対し、死神は多義的に解釈されていた。主な批評文から抜粋すると、J. マーチンは「死神の美しさは希にみる優しさにある」¹⁾と述べているのに対し、A. V. コットンは「死神に与えられている動きは徹頭徹尾全ての心を冷気で震えあがらせ、大鎌をふるって全ての人間の愛や希望や不安、志しを切り捨ててしまう不気味な骸骨である」²⁾と記している。マーチンが死神に優しさを見いだしているのに対し、コットンは冷酷で情け容赦ない強い死神として捉えており、死神は優しさと冷酷さという両極性を有した存在として解釈されていると推測できる。

またC. バーンは死神を「戦いの神」³⁾であるとし、戦争と結び付けている。同じようにH. エワートは「戦いの神と死の天使は1つ」⁴⁾と述べ、死と戦争という二重性を有した死神が、戦争という悲劇から自由にしてくれる存在であるという独創的な解釈を行っている。

さらにM. シーゲルは「新兵には超越的の兵士であり、年老いた母には上品な求婚者であり、バルチザンの女には裁判官として、さらに若い娘には

最後の誘惑者、旗手には友としてそれぞれ出現するのである」⁵⁾と登場人物毎に変化する多様性のある死神の出現を指摘している。

前回の研究より、ヨースが動きによって意図したと考えられる威厳のある緊張感をもった死神の姿が、批評では

- ・優しさと冷酷さという両極性を合わせ持つ
- ・戦争と死という二重性を有した存在
- ・登場人物毎に変化する多様性のある出現という両極性、二重性、多様性が顕現する存在として、多義的に解釈されていた。

②重層する死のイメージ

多義的に解釈されていた死神を死のイメージという視点より考察する。

フランスの歴史学者であるP. アリエス『死と歴史』をもとにキリスト教文化圏における死のイメージを歴史的に辿ると、12世紀以前人間種としての運命の受諾、12、13世紀「最後の審判」個人としての死、14、15世紀死の平等、17、18世紀エロスとタナトス、19世紀以降死の隠蔽と、多様な変遷を経て死のイメージが重層を成している。⁶⁾

『緑のテーブル』における死のイメージは

- ・登場人物達が苦しんだり抵抗せず、人間種として運命を受諾
- ・死神の動きと斜めの対角線による最後の審判
- ・登場人物毎に死神の関わり方が異なることで、明確な個人の死
- ・登場人物の設定による平等の死
- ・若い娘と死神によるエロスとタナトス
- ・黒服の紳士たちによる死の隠蔽

であると考えられる。キリスト教文化圏で経時的に重層した死のイメージが死神とその他の登場人物達との関わりの中にすべて取り込まれ、凝縮されていると思われる。その結果、観客に各々の死のイメージを喚起し、生命の尊さを深く印象づけていると推測される。

(3) 作品評価

①振付

振付の独自性に対する評価は、初演直後の批評にみられ、特にコンクールを主催したA・I・Dの批評では「『緑のテーブル』はしっかり身についたテクニクが結合し、確かな独自性をもった振付は着想の意外性があり、大胆な傾向で、踏み固められてきたこれまでの道とは敢然と遠ざかっている」⁷⁾と述べられており、独自性のある振付で、着想の意外性をもった革新的な作品として高い評価を受け、1位を獲得したことが確認できる。

②テーマ

反戦という社会的テーマを舞踊史上初めて取り

上げ、風刺的に描かれていると評され、いまだに時事的テーマであると指摘されている。

ヨースはインタビューで「私にとって最も重要なことは『緑のテーブル』で政治的なことを行うことではなく、人間の苦しみや死なのである」⁹⁾と述べている。このヒューマニズムの立場は「我々に立ち止まり、考えるよう力づけてくれ、私達の心に涙を流すものであり、舞踊史上殆ど唯一無二の偉業」⁹⁾であり、「無慈悲な戦争の悲劇的メッセージはその人道的アピールで全世界的なのである」¹⁰⁾と高く評されている。政治的な反戦スローガンではなく、戦争がもたらす死を描き出すことで、人道的に生命の尊さを訴えかけたところに『緑のテーブル』の真髓があるのではなかろうか。

③総合芸術

ヨースは「ドラマティック・ダンス」を提唱し、劇的ストーリーと動きに音楽や美術といった関連諸芸術が調和した総合芸術を目指していた。この点も『緑のテーブル』のボキャブラリーと構造の偉大なる簡潔さの中に、F. コーエンの偉大な楽譜、H. ヘックロスの衣裳や仮面、活力ある照明、そういった全てが完璧に混合されているのである。ヨースはこのバレエにおける構成要素間の芸術的統一を成功した¹¹⁾と評され、バーンはこれを「全体の確実性」¹²⁾と呼んでいる。こうした結集である『緑のテーブル』が「communicativeな力と文体力」¹³⁾を持ち、「永遠に力強い表現性をもったイデオロムで振付けられたので他のほとんどのバレエよりも個人的演技に左右されないのである」¹⁴⁾。こうして『緑のテーブル』は「殆ど全ての批評家が永遠の傑作」¹⁵⁾と評価することとなったのである。

以上より『緑のテーブル』は反戦という時事的かつ社会的テーマを取り上げ、人道主義的立場から訴えかけた。振付けに独自性があり、構成要素間の芸術的統一が完成されている。個人的演技に左右されない、永遠の傑作であるという作品評価が成されている。

(4) 『緑のテーブル』における作品の同一性

『緑のテーブル』における作品の同一性を考察した結果、ヨースはJ. アンダーソンの「マテリアリスト」¹⁶⁾の立場から動きの集合体にこそ作品の本質を認め、かたくなに動きを守り、変更を排斥することで作品の同一性を保っていると考えられる。従って「舞台芸術においてどの作品も2つの上演が全く同じでは有り得ない」¹⁷⁾としても、『緑のテーブル』は堅固な同一性を所有するダンス作品であると考えられる。

3. 結論

『緑のテーブル』の特性を次の3項目にまとめ、結論とする。

1 『緑のテーブル』は舞踊史上初めて反戦というテーマを取り上げ、それを人道的に訴えていくことを主眼に、動きと音楽、照明、衣裳、装置が調和し、芸術的統一を図り、ドラマティック・ダンスとして完成した作品である。

2 『緑のテーブル』はキリスト教文化圏で経時的に重層した死のイメージを全て取り込み凝縮している。人は『緑のテーブル』の中に歴史が背負ってきた死の多様なイメージを見ることで、死神を多義的に解釈し、各々の心に各々の死のイメージを呼び起こし、人間存在の根源的問題である死を直視させ、生命の尊さを深く心に刻みつけるのであろう。

3 ヨースは「マテリアリスト」の立場から動きの変更を排斥し、『緑のテーブル』を堅固な同一性を所有したダンス作品にし、時代を超え、地域を超え、人々に普遍的メッセージを与え続けている作品にしたと結論づけられる。

註

- 1) John Martin, The Dance; War Satire, The New York Times, 1932. 10.2, p. 8
- 2) A. V. Coton, "The New Ballet: Kurt Jooss and his Work", Dennis Dobson, London, 1946, p. 49
- 3) Clive Barnes, The Constantly-set Table, Dance and Dancers, 1967. 5, p. 26
- 4) Hans Ehrmann-Ewart, On The Green Table's Twenty-fifth Anniversary, Ballet Annual, v12, 1958, p. 116
- 5) Marcia Siegel, The Green Table-sources of a classic, Dance Research Journal, v21, no1, 1989, spring, p. 21
- 6) Philippe Aries, 伊藤晃, 成瀬駒男訳『死と歴史』みすず書房, 1983初版, 1989第7刷
- 7) Les Participants au Concours de Choregraphie 1932, Archives Internationales de la danse, 1932. 10, p. 14
- 8) Anna und Hermann Markard, "Jooss" VTR, Im Auftrag von Inter Nationes, Koln, 1985
- 9) P. W. Manchester, The Season in Review, Dance News, 1964. 12
- 10) Mary Whitney, A Tragedy of War, Ballet News v4 no6, 1982. 12, pp. 32-34
- 11) H. Ewart, Ibid, p. 115
- 12) C. Barnes, Ibid, p. 28
- 13) Allen Hughes, The impact of Les Sylphides and "The Green Table", The New York Times, 1964. 11. 22.
- 14) Kurt Jooss and His Campany, Ballet Today, 1967. 1/2, p. 11
- 15) Arthur Todd, Everything from A to Z, The Dancing Times, 1967. 5, p. 414
- 16) Jack Anderson, Idealists, materialist, and The Thirty-two fouettes, "What's Dance" 1975, p. 410
- 17) J. Anderson, Ibid, p. 411